

2年生 哲学シリーズ③ (みんなの授業研)

2019. 10. 15

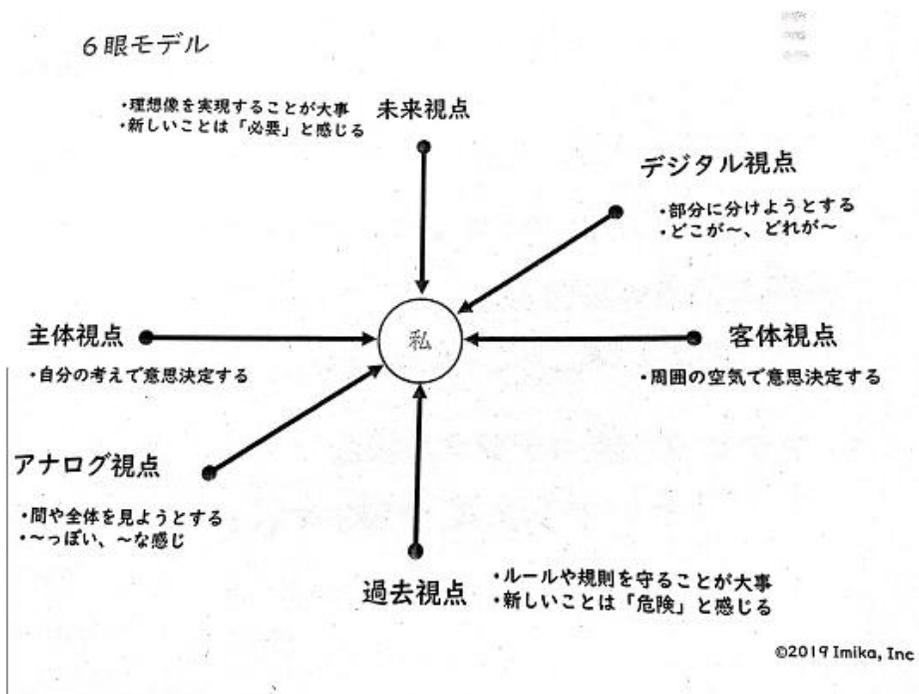
10月25日に行われた「2年生 哲学シリーズ」は二年生全員を対象としたみんなの授業研の一環として行った。授業をしてくださるのは、株式会社イミカの原田博一先生。実は2年生は「哲学対話」と題した授業を受けるのは三回目である。一回目は10月7日の向本校長先生による‘哲学とは何か?’というテーマの授業。二回目は10月9日、今回授業をしてくださる原田先生の第一回目の哲学対話であった。そして今回が哲学対話として第三弾ということである。

さて、本題に入ることとするが、第三弾の今回のテーマは「人にはそれぞれ考え方のクセがある」というものだった。人のクセというものは見ただけでわかるものではなく、会話つまりコミュニケーションをすることで相手がどのような考えを持っているかというのがわかるのだという。しかしコミュニケーションと一言で言ってもどのような意味があるのか。原田先生は「コミュニケーションとは考えや気持ちを相手に伝えて共通点を作ること。つまり人が‘人間’として生きるうえでとても大切な力です。」と仰った。一体コミュニケーションが‘人間’として生きるうえでとても大切な力とはどのような意味なのか。うなずいて理解している生徒もいれば、どういう意味なのだろうという顔をしている生徒もいた。さらに、「偏見というのは誰しものが必ず持っているものなのです。」とも仰っていた。

「偏見」と聞くと普通ではあまり良い印象を持つ人はいないだろう。それは生徒だけでなく教員、大人もそうであろうと考える。しかし確かに人それぞれ顔が違うように、生まれも育ちも違うことから、考え方も違いうだろう。そのように考えれば偏見が人それぞれあるのは当然のことだと今日原田先生の一言で気づかされたのである。



原田先生は今回の授業を経て人の見方を変えることができるかと仰った。例を挙げると、「あの人はいつも私のことを否定してくる・・・」という考えや見方が「あの人と私は『考え方が違う』ことがわかった！」というように変わるのだという。ではそのために必要な会話方法とはどのような物があるのか。それは6眼モデルという表を元に会話をしていくのだという。6眼モデルとは以下の図の通りである。



(図 1)

中心の円が自分自身で、上下左右斜めの方向から視点が自分自身に向いているという図である。

まず上下の矢印から説明していく。上からの視点が未来視点である。未来視点とは新しいことは必要であると感ずる視点であり、名の通り未来に向かっている視点が会話の中にあらわれることがあるのだという。次に下からの視点が過去視点である。この視点は新しいことは「危険」と感ずる傾向、つまりルールや規則を守ることが大切であるという視点のあ

らわれなのだという。

次に左右の視点である。まず左からの視点が主体視点（もしくは個人視点）といわれる視点である。この視点の特徴は「自分が自分が」という考えを持つ人、自分の考えで意思決定する人に多い傾向なのだという。次に右からの視点が客体視点（集団視点）といわれる視点である。この視点では自分の意思、意見があるにも関わらず、最終的な決定は周囲の空気で意思決定をする人に多い傾向なのである。

最後に斜めの視点である。まず左下からの視点である。この視点はアナログ視点といわれるものである。特徴としてはよく高校生等が何かを見たときに特に理由もなく「かわいい」と言っているのを耳にしたことが一回はあるのではないだろうか。この全体的に物事をとらえる発言こそがアナログ視点なのだという。次に右上からの視点である。この視点はデジタル視点といわれる。この視点の特徴としては、先ほどの「かわいい」と発した言葉に対して「なんで?」「どの辺が?」と部分的に物事を捉えようとしたり、物事を理論立ててする発言をデジタル視点というのだという。

ではこの表をどのように活用してコミュニケーションをするのか。まずやり方としては自分自身でどの視点の傾向が強いのかを‘%’で表すのである。ルールとしては上下（未来・過去視点）、左右（主体・客体視点）、斜め（アナログ・デジタル視点）この対称になっている視点に対して何%かを記入するのだが、上下、左右、斜めがそれぞれ100%になるように割り振るのである。生徒達は自分のことを考えながら「俺こっちなあ?」「私こっちやねんけど何%ぐらいかなあ?」などと自問自答し記入していた。



最後の行程として、今回は3人で1グループを作成し、それぞれ話し手と聞き手に分かれて実際に会話をした。話し手が1人、聞き手が2人になり会話をしていくのだが、1人あたり

の会話時間は5分ずつで順番に交代していくのである。話し手は、聞き手の質問に対して何でも好きなことを話すのである。聞き手は話し手に対して会話を振っていくのである。そして聞き手は会話の中から話し手の未来・過去視点、主体・客体視点、アナログデジタル視点のそれぞれの視点に対して自分自身にもやったように対称の合計が100%になるように割り振るのである。その演習をして実際に生徒は思い思いの会話をしコミュニケーションをしていたのである。そして最後に自分がつけたそれぞれの%と他人から見た%を見比べるのである。実際に見比べた生徒は「あんたそんなこと思ってたん?」「俺が自分で思ってたんと違う!」「おー!合ってる!」等といった会話が飛び交っていた。

ではそれぞれの視点は何を言っているのかということ。まず未来・過去視点は「何を問題と感ずるか」の違いが表れやすいということです。次に主体・客体視点は「意思決定」の違いが表れやすい。ということです。最後にアナログ・デジタル視点は「物事のとらえ方」の違いが表れやすい。ということでした。



これらの行程が授業の最初に仰っていた、「人にはそれぞれ考え方のクセがある」ということではないか。そのクセをコミュニケーションをする中で見抜き、6眼モデルに当てはめることで、相手のことを理解することができる。例を挙げるとすれば、感覚的に合わない相手がいるとする。「それぞれ違うしなあ」と思い、止まっては思考停止になるのだ。そうではなく、根本的にどのように違うのか？と考えるということが重要なのである。つまり、コミュニケーションとは‘人が「人間」として生きるうえでとても大切な力’であるということを改めて学んだのではないかと考える。